

放送人の会

No.65
2014.3.19

〒102-0094 千代田区紀尾井町1-1 千代田放送会館 3階 Tel.&fax03-3221-0019 Mail info@hosojin.com

発行 一般社団法人・放送人の会 会長 今野 勉

編集担当 伊藤雅浩 (広報委員長・編集長)、鈴木典之、前川英樹 (HP担当)、松尾羊一 事務局 佐藤真美子、須斎恵美子

日韓中テレビ制作者フォーラム

テーマは「出会い〜都市・文化そして人間」

会長

今野 勉

1、テーマの趣旨

第14回日韓中テレビ制作者フォーラム in YOKOHAMAのテーマが「出会い〜都市・文化そして人間」に決まりました。韓国・中国側に伝えるテーマの趣旨は次の通りです。

「日韓中テレビ制作者フォーラム日本組織委員会」は、第14大会(日本)の開催都市を横浜市としました。

本年度から、日本、韓国、中国の政府が東アジア3カ国の文化都市構想を始めることに日本組織委員会が賛同の意を表しての決定です。

東アジア文化都市構想に選ばれた日本の都市は、横浜市です。韓国は光州市、中国は泉州市です。

都市は様々な人が集まり、出会うところ。男と女、南の人と北の人、海の人と山の人など様々です。

都市はまた「異なる文化」の出会うところでもあります。西の文化と東の文化、現代芸術と伝統芸術、農耕文化と狩猟文化など、これも様々です。

そしてまた、都市自体も別の都市と出会います。文化都市構想がその出会いを目指

しています。

出会いは、新たな人間関係をつくり、新たな文化を生み出します。

出会いは、いつもハッピーエンドとは限りません。

挫折や時には衝突も生み出します。それらすべてを併せて、今回のテーマを「出会い〜都市・文化そして人間」とします。

このテーマのもと、実りある横浜大会にすべく、準備に入ります。テーマ作りに参加したプロジェクトチーム

は、私の他に、前川英樹、渡辺紘史、山田尚、長沼士朗、関佳史の皆さんです。これから本格的な実行委員体制を作っていきます。皆さん、ご協力のほど、よろしくお願ひします。

2、放送人の証言 活字化第一弾

放送人の証言の収録が180人近くになって、その活用が議論されるようになってきました。

映像のままでは何と見ても見るのに手間と時間があるのです。どうにかして文字化(データ化)したいと思つていたところ、NHK放送文化研究所と東京大学情報学環が、経費も含め

て、文字化(データ化)を引き受けてくれました。

その成果の第一弾として、84人分の証言の、注釈付き原稿が8巻の「放送人の証言集」として、活字印刷されました。

石田英敬教授のもと、東京大学情報学環メディア・コンテンツ研究機構のスタッフの皆さんのご協力のお蔭です。

証言を活字で読めることになって、作業のスピードは格段にあがること必定です。

私もその一部を読みました。たとえば第一巻の13人分など、あつという間に目を通すことができます。精緻な文字起こしの効果もあつて臨場感も十分です。

この証言集で、今後の活用企画を考へていきたいと思つています。

名作の舞臺裏 第37回

「ミエルヒ」

北海道テレビ・2009年12月放送
地域発ドラマとして評価され、芸術祭賞
優秀賞、ギャラクシー賞など受賞

日時・3月21日(金・祝日) 13・30
場所・横浜・情文ホール
ゲスト・安田顕(出演) 青木豪(脚本)
嬉野雅道(企画) 藤村忠壽(演出)
司会・渡辺紘史(放送人の会)

放送人グランプリ下馬評座談会

恒例のグランプリ下馬評座談会をお届けします。放送人グランプリのノミネットの締切りは3月末でほとんど日数がありませんが、お役に立てれば幸いです。いつものようにX、Y、Zは単なる記号で特定の発言者を示すものではありません。

【放送界の話題】

X テレビ60年の節目、非放送系との連携・競合、とテーマが上がっているが、最近のワイド番組ではインターネットのツイッターなどをフィードバックすることが多い。

Y オンデマンドを含め、連ドラを生で1週間に1回みるというしきたりは貫徹しなくなった。まとめてみるとか、タレントのネットの情報からテレビに接近するとか、それもテレビへの関心だろうが、ITからテレビへの逆アクセスが増えている。

Z 日韓中フォーラムで中国、韓国に行く、気ままに録画してみている状況がわかる。あちらでは著作権意識が希薄で、日本の番組も「半沢直樹」など録画されネットでどんどん流れる。

X 視聴率をみていると、テレビ朝日が一人勝ちで、これまで番外地だったテレビ東京は視聴率を気にせずに少ない予算でサラリーマン好みの特定視聴層に絞った経済番組を作るカルチュアがユニークな編成を生んでいる。

Y テレビ東京は経済番組、科学番組、「カ

ンプリア宮殿」と和風総本家でも必ずきちんと取材している。知楽というか、そんな局の姿勢がみえる。各局は横ならびで似たようなバラエティーで共食い視聴率競争に耽っている。

Z 「もやもやサマーズ」はサマーズの二人が単に町を歩いているだけ。逆向きの電車に乗りませんか、と会社に行かず反対方向の電車に乗ろうという番組。YOUは何しに日本へは成田で物色し、これはと思う相手の旅先を追う。テレビ東京のこれらの番組は予算が少ないこともあるが、頑張っているなあ、とみえる。

X 「YOU…」とは逆に日本から出て行った日本人を追いかけている番組がいくつかある。テレビ東の「世界何故そこに日本人」が「から始まって、各局似たような番組をマネしはじめた。

Y 「YOU…」は取材でできなかったものもどんどん出すが、これは生中継のセンスだ。いまのところテレビ東の視聴率は高くないが、テレビ朝日が刑事もの、ミステリーで視聴率を上げてきたときの勢いに通じるものを感じる。

Z スタジオにタレントを集めてわあわあ騒ぐのをやめて、どんどん生きていく人間に取材に行く、現場に出る、それはこれからのテレビの編成方針を予兆していないか。

X かつてプロダクションを集めて企画会議をする、「それはテレビ東向きでしょう」というダメ出しがでた。ダメな企画へのヤユだったもの。(笑)

Y 深夜番組ゾーンがネット経由のテレビファンやユーチューブを意識した番組など、実験性の番組、あるいは裏テレビ性番組に進化(退化?)している。テレビ東の番組はこれをゴールデンでやり始めた。ほかの局はNHKも含めゴールデンとはこんなものだと思っ込んで制度疲労を起している。

Z テレビ東だけはゴールデン以外の全日編成の中でも次々はめこんでくる。これは注目している。

Z 一種の隙間産業かとも思うが、系列制作の「和風総本家」(テレビ大阪をみると、日本の職人が外国の職人と交流、匠の魂がみえてくる。)

X ドラマでは「3匹のおっさん」が、裏のフジのドラマ「天誅」間の「仕事人」に高くないが視聴率で勝っている。

Y この30、40年間、全部のテレビ局がフジテレビ化していたが、昨今は「テレ東化」がバカにならない。

Z いまのテレビはタモリとサンマとたけしだ。タモリの後ろを向いてくすくす笑うような笑い、サンマはどの局でもやっている喧騒の笑い、たけしはテレビ東で「誰でもカソ」など独自の美術番組を開発している。サンマ的なものはそろそろで、タモリも「笑っていいとも」の限界に気付いていた。そんな基幹番組というべき番組が変わってきている。

X テレビ東の番組を言葉にすると何だろう。大テレビにたいする小テレビ。テレビのラジオ化。マスコミとミニコミの中間のメディアイコミ。

Y 是枝裕和氏が朝日新聞の論壇であれかこれかの二分法でなく、ジャンルの多様性を認める共生の社会を提唱していたが、テレビの世界もテレビ東の方向を認める多様性と共生の世界になって欲しい。

Z いや、それは持ち上げすぎの文化論で、テレビ東の面白さを言い当てていない。王道や正道でなく抜け道、ニッチの面白さだ。

X 「ほにゃたて」の中止問題は、3回やった勝負を順番を変えて放送したもの。劇的に盛り上げようと編集した内容がバレた。

Y いろんな勝負があつたが、カギを開けられるか開けられないか、手品のタネが見破れるかどうか、の勝負は企画にならない。カギも手品のネタバレはタブーなのだ。ボカシの画ばかりで手元を写さない。自縛自縛では画は撮れないかだ。

Z 企画の原理は面白いがワンクール程度でネタは尽きる。シリーズ化すると現場は無理に無理を重ねる。いさぎよく止める勇氣を持ちたい。

X 「明日ママがいない」の問題はいろいろ考えさせられる。

Y 日テレに抗議した慈恵病院には非難と励ましの両方の電話が殺到していて、病院はホームページに詳細なメッセージを発表している。

Z 日テレは「ドラマを最後までみてください」と言ってきたら対応をしないように報道されているが、病院との話し合いはしているらしい。

X この問題をまず取り上げたのはラジオの「セッション22」(TBS)で、慈恵病院のスタッフを呼んで2時間やった。「ポスト、ボンビ、ドンキ、オツボネ、ロッカー」など種々が学校で話題にされ、施設の子がいじめられショックをうけている、「施設の中の暴力問題はある。施設はほとんどボランティアを頼りに運営されていて、働くひとの意識はいろいろだ」などの発言のあと慈恵のスタッフのひとり「あのドラマは施設の子供たちを生き生きと描いている」と肯定したりした。

Y ドラマは作り直されたのだと思う。3回くらいまでの子どもたちの生き生きとした雰囲気が消え、お行儀のいいお説教ドラマになった。現場はやる気をなくしているのではないかと危惧する。

Z いまテレビ番組を放送したらどんな反応があるか予想はある程度できる。この番組はあまりに脇が甘い。太田光がブログで「最後まで見てください」というのは最後にはみんないい人になると設計されているわけで、そんなものこそ面白くない」と書いている。その通りで、最初「けおどし

で、だんだんいい人になっている。手直ししてそうだったのかはわからないが、施設長が子どもの前で大演説をする場面は問題になってからもう一度念を入れて書いたのだと思う。

X 表現の自由だ、あれはドラマなんだから、許されるという考えが片方にある。しかし「最後まで見てくれ」というのはどうか。最初の1回、2回で納得させてくれと言いたい。いま「表現の自由だ、何をやってもいい」と言うのは難しくなっている。倉本聡は「医者のドラマを書くなら、好き嫌いは別として医者たちが納得するドラマでなくてはダメだ」と言う。医者でも農家でも同じことで、倉本はウソがないもので勝負してきた。

Y 「大きなウソをついても小さなウソはつくな」と彼は常々主張している。「時は立ちどまらぬ」(テレ朝)には「あれは被災者の真実ではない」との声はあるかもしれない。しかし「あんなことはある」「そんなこともある」と小さなウソの真実に納得する。そう思わせるのが脚本家や演出家の力だ。「明日ママ……」には残念ながらその力がなかったのだ。

Z 「いつのよりのゆりかご」赤ちゃんポストの6年間(TBS)は芸術祭優秀賞を受賞している。赤ちゃんポストについては熊本朝日放送が4年前ドキュメンタリーで非常にすぐれた作品を作った。

X しかし「明日ママ……」の子役はうまい。これはグリム童話にもあるネガティブなメ

ルヘンで、子役だけでできているドラマだと言っている。子役使い、子役ドラマではないドラマとして評価する。

Y 親に捨てられたり、虐待された子どもたちがあのドラマではゴマすったり、いろんなことをして世の中と対峙している。そのことは評価するのだが、世間のステレオタイプの考えに対して闘うのならもっと覚悟してやれと言いたい。

Z 問題なのは里親制度だ。古くからある制度で共同体ぐるみで成立してきた制度だ。欧米ではキリスト教の博愛主義に支えられているが、いまも精子の売買まで現われている。あのなかでは里親制度にもっと突っ込んでいいのだし、家族を構成している枠組みが破綻をきたしていることが出てきているようにも思う。

X 里親制度の現状は江戸時代とは全く違ってきている。

Y あやつられてニセ・ベートーベンの番組を作った「Nस्प」のDの苦衷がわかる。あまりによくできた話で信じていいのかなと思つたことはあるだろう。しかし特別な売り込みがあったとか自己顕示欲がミエミエでないかぎり、番組制作者が対象を疑うことはまずない。途中おかしいと思つても原爆被爆者だ、主題はいい、正しいと番組を作つてしまった。

Z ドキュメンタリーは本来、性善説によつて成立するものなのだ。その危うさに耐えられないニセモノの正義の味方の姿勢にあぐらをかいている作品に鼻白む場合もある。

X Dも世間も美談が好きで見事に騙された。「お気の毒さま」と言つしかない。

Y どうして騙されたのかの検証番組を作れば面白い、意味のあるものができるのではないか。

【ドラマ】

Z ドラマ部門だが、際立った特色はありませんか。

X 手前味噌を承知で言えば、放送人の会の会員の皆さんが活躍した年度だった。例えば、石橋冠が松本清暉ドラマ「黒い福音」に堀川とんこうの「時は立ちどまらぬ」、片岡敬司の「格好つさら」などがあつた。いずれもドラマの王道というか本格派の力作だ。

Y ドラマではないが、Nस्प「和食・千年の味のミステリー」で柴田昌平は味がもつ深淵に迫つた。最近亡くなった映像作家姫田忠義を継ぎ、「クニ子は不思議の森」(NHK)で縄文文化を焼畑農業から掘り起こした傑作を世に問うた人。

Z それを言うなら映画「太秦ライムライト」(BSプレミアム)を挙げたい。時代劇の京都では5万回斬られた男で知り人ぞ知る福本清二を主役にしてフォークスした。

X 映画界ではすでにアカデミー特別賞を得たが、テレビ時代劇でも「水戸黄門」をはじめ大半の時代劇で斬られている。

Y 「太秦ライムライト」はチャップリン

の名作によせた時代劇の身に染みるオマージュになっている。時代劇衰亡の今、誰かが取り上げるべき役者だ。

Z そこです「大河」と「連続テレビ小説」だが、「八重の桜」はあれだけ騒がれたが終わつてからは論評が少ない。

X 後半、明治になって同志社の方に話が移ると別のドラマになってしまった。前半をみて、会津以降をどう作るのかと案じていたが、作れなかった。

Y あのドラマは八重の兄の山本寛馬をめぐるドラマだ。演じた西島秀俊もよかった。

Z 賊軍、官軍、薩長、明治、官僚制、天皇制：それが太平洋戦争まで行くのだが、その根っここのころでの会津、東北列藩同盟賊軍説による皇国史観は見直されてこなかった。明治の近代教育の中心的人物は山川家をはじめ会津から出ているのだが、そんなことを見落とした片手落ち史観の見直しに期待した。

X 会津は賊軍として昭和にいたるまでコンプレックスを抱き続ける、そこは描き難いとは思いますが、描けていけば日本の「風と共に去りぬ」になる可能性があった。

Y 江戸時代は封建制の暗い時代、明治になって文明開化で富国強兵の日本になったという史観に初めて異論を唱えた大河ドラマだったわけだ。

Z 「軍師官兵衛」は話も役者もどこか軽い。官兵衛の岡田准一も、信長の江口洋介、秀吉の竹中直人も以前演じた「竹中秀吉」の

マンガ演技の焼き直しだ。感じのいい時代劇なのだが。

X 「風林火山」の山本勘助と比べてしまふ。軍師ならえぐい悪智恵が出てくる今後に期待したい。

Y 「あまちゃん」は毎朝コントをみている気分、BS1総合→昼の再放送と3回つきあった。(笑)

Z 災害から復興、過去の出来事から再生に至る現在進行を時間軸とし、バブルの昭和から平成までの30年余りの青春の時間を通して、いろんな別れと再会が描かれる。誰もがそれぞれの人生の中のおもちゃ箱にいろんなおもちゃをため込んでいる。おもちゃとは人生でかわつた思い出の数々だ。宮藤官九郎はこうしたおもちゃをこれでもか、これでもかと、ぶちまけてくれた。

X 軽快な音楽、演芸部出身の若い演出家の起用、新しい演出の工夫。それらが若い視聴者を獲得した。視聴率だけでなく、ネット、NHKの番組のプログ、掲示板、ツイッター総動員の話題沸騰の番組になった。

Y 官九郎はうまい。「池袋ウエストゲートパーク」「木更津キャッツアイ」などのセンスがNHKで開花した。

Z つぼを知っていて、きちんとしたテーマを持つている作家なのだ。

X 「時計屋の娘」(TBS・芸術祭参加)は沢尻エリカと国村隼の出演。ビンテージの時計の修理をめぐって物語が動き出す。スキヤンダルで誤解された沢尻エリカかつて「平成の李香蘭」なのだ。(笑)八木康夫は

彼女で再挑戦してほしい。

Y これと「足尾から来た女」(NHK)も池端俊策の脚本。

Z 「足尾…」は、演出のまだ若い田中正が、田中正造をやりたいと提案した。池端氏と相談するうちに正造が同郷の少女何人かを福田英子の家に預け、教育を授け、暮らしを立てさせようとしていた事実を掴み、ドラマに練り上げた。

X フクシマの震災と故郷喪失を意識しながら、100年前の公害、そして権力による強制立ち退きを強いられた「土着のおんな」が明治のインテリのなかで翻弄されながら生きて行く姿を描いている。歴史上の人物と架空の新田サチという女性をあたかもゆるぎない事実のようにみせる池端氏の脚本は実にうまい。

Y 塩田純氏などがやっている戦後史プロジェクトの最近の東北シリーズのドキュメンタリーとも重なる。前に塩田純氏が「南方熊楠と田中正造」を作った。

Z 新田サチと尾野真千子が家政婦になる福田英子は実在の人物で石川三四郎、原敬もそう。田中正造や足尾で運動をやっていた人々と社会主義者たちの近きも事実だ。つまり実在の人物たちの中に架空の女性をおき、しかも警察は彼女にスパイをさせる。それに気づいて彼女は帰る。

X 「明星」派や市川房江などとかく有字社会(知識人の女性で描きがちだが、新田サチという名もない無字社会の側面から近代女性史を見直したテーマ性を買いたい。

Y 尾野真千子の眼力(めぢから)の強さと栃木弁の無アクセント、しり上がり調子の突き刺さるような台詞には脱帽だ。

Z 福田英子をやった鈴木保奈美、母親の藤村志保も褒めよう。

X 藤村志保はうまいのだが、「軍師官兵衛」のナレーションは北朝鮮の女性アナミたいな妙なフシつけでなじめなかった。体調がわるかったのか6回でやめ広瀬修子に変わった。

Y 「緊急脱走」(テレビ朝)の天海祐希と「ドクターX」(テレビ朝)の米倉涼子は似たようなキャラクターでしよつちゅう出てくるが、激辛キャラが生まれている。

Z 「半沢直樹」論はもういいのかな？

X 中国でえらく受けていた。

Y あのドラマ以降他局のドラマも多かれ少なかれ影響を受け、勸善懲惡、悪をやっつけて溜飲をさげるものがふえた。その対極にある「WOMAN」(日テレ)のようなリアルなものを評価したい。

Z 「半沢…」はよくあそこまでやったという気がする。

X 銀行、病院、警察、教室がドラマによく取り上げられるのは密室性があるからだ。権力は密室で作られる。役員会、重役室も密室ドラマだが、「画にならない」からドラマは避けてきた。一見紳士めいた男たちが緊密無礼にやっっているが、面をひん刺くとこんなものだろう、とあの濃いキャラクターでデフォルメした効果。

Y 「緊急脱走」(TBS)も人物配置が似て

いる。東大法学部卒の警視庁と警察庁のキヤリアとして現場の争いだ。

Z 「隠蔽捜査」は警察の仕組みをしつかり描いている。

X 原作は今野敏。「ハンチョウく神楽署安積班」と同じだが、同じ路線の甘さがこころではない。

Y やはり堺雅人だろう。「篤姫」の家庭「リーガルハイ」の古美術研介のハイテンション芝居、弁護士のリトリックは面白かった。

Z 「リーガルハイ」は古沢良太の脚本。

X 脚本家ではそれと「WOMAN」。黒川が舞台の「最高の離婚」(フジ)の坂元裕二もいい。

X 「夫婦善哉」(NHK大阪)は安達もじり氏の演出で、豊田四郎の映画とは違う視点から丁寧に作られていて、よくできたドラマだった。

Y 織田作之助の原作を生かして、大阪のミナミの雰囲気がちんと描かれていた。主役の二人、尾野真千子と森山未來はよかったのだが、森山が大阪のぼんぼんでなく東京の坊ちゃんにみえたのは残念。夫婦善哉には森繁久弥と淡島千景があるからどうしても比べるのだが、森山未來には若過ぎて荷が重い。

Z テレ朝が55周年記念で大作をどんどん放送している。「松本清張を夜連続スペシャル」第1夜「黒い福音」(P五十嵐文郎)第2夜「黒い福音」(石橋冠監督)、「オリオンピックの身代金」などだ。

X 「オリオンピック」は1964年東京オリオンピックが舞台。警察総がかりのミステリーで面白かった。

Y 「時は立ちまらぬ」もテレ朝だ。

Z 「時は立ちまらぬ」は現在最も言わなければならないことを言い切ったドラマだ。三陸を舞台に、震災で家族を死なせた漁師一家(浜口家)と全員無事だったサラーマン一家(西郷家)の因縁、葛藤、決別、和解をそれぞれの人間が持つ感情に寄り添いながら、丹念に描いた。

X 阪神淡路のときは被災者同士の対立を描くの10年かかった。今回は3年でよくあそこまで描けた。

Y 「キルトの家」は1年目だが、あそこではきつかけとして、震災は遠景として描かれたが、ここでは真正面から当事者である被災者の本音をたたきつけた。

Z 今回の災害ほどみんながいろいろな形で映像を残した災害はない。災害後3年間数知れない映像が放送され、みんなが見ている。それに向かって作ったドラマだ。災害にあった人と同時にテレビを見ていた人にとって見るのかと投げかけている。その意味では非常に勇気が要る。しかし、あのドラマを見ると、それぞれの立場で納得できると思った。

X 焼け跡、災害の跡は関東大震災と阪神淡路、東日本大震災と3月10日東京大空襲が似ている。何にもなくなった連中が「お宅もやられましたか、うちもやられました」と挨拶する関係、被害者が持つ鬱々とした

感情と善意の手を差し伸べるボランティアの感情、応援のタレントや支援者が帰ったあとぞろぞろと避難所へ帰って行く人たちの感情はどうだったのだろうか。

Y ブラックジョークになりそうなのがユーモアをもって描かれる。次男坊が5歳も年上の女と結婚したいと言う。黒木メイサが兄嫁になるとかんでもない話のようだけど、そうかもしれないと思わせる。両家が初めて会ったとき両家のおばあちゃん、母親がそれぞれの立場でものを言う。「もしかすると国会議員になる人が漁師の嫁になるのは面白い」とかは、いわゆるローカル世界のグローカルの世界にもう入っている。

Z 岩陰でのメイサと渡辺大とはSEXなのか、橋爪と吉行のハグ、中井と柳葉の殴り合いつねりあい、このドラマには3つの肉体接触が描かれる。テレビを見る人はいろいろに見るだろう。あの場面は実に綺麗だった。

X 「岸辺のアルバム」のとき「等身大のドラマ」という言葉が流行した。それまでは「リアリズム」だった。考えてみると山田太一のドラマは等身大のドラマなのだ。変にリアリズムで追求するという姿勢ではない。しかし虚構のなかで人物たちが動き始める。「ああ言うかもしれない」「こうするかもしれない」と見る側は思う。そんな文体、語り口に説得力があるのが山田ドラ

マなのだ。

Y 導入部で両家が会う前に車が止まる。また早いからちよつと待とうと父親はハンドルをにぎって落ちつかない。彼とむこうのおやじの間に子供の頃何ががあったという伏線が効いている。

Z 当事者にしかわからないこと、思いもかけない40年前の誤解がとけるシーンに重なるホンの巧みさ。

X 2階が上がって暴れたり、仮設に入っ「これが家か」と幻滅したり、は現地の人には痛切にわかって貰えるところだろう。

Y 橋爪はうまい。いわゆる漁師の面(つら)じゃないが、あんな漁師もいるのだろう。ポキヤブラリーについて直しては山田氏にスタッフが言う「漁師だつて新聞も読むしテレビは見るし」と抵抗された。

Z それでよかったのだから。漁師言葉では清潔感が出なかつたらう。

X いま港町へ行くと漁師の家はセキスイハウスの昨日建てましたというような立派な家ばかり並んでいる。土間に網の束が置いてあるような都会の演出家が想像するような貧相な家はないもの。

Y 黒木メイサは硬質の、固い感じの女にみえて清潔感があった。

Z 最後の夫婦で崖に立っているシーンは小津安二郎の映画で笠智衆が立ち上がり「きょうも暑うなるぞ」と呟くシーンを思い出した。

X あそこに津波を思わせる波がないと変にロマンチックに終わってしまう。

Y 「頑張れ！」とか「絆」とかの国民的熱狂の大合唱には疑問があった。

Z 二つの家族だけでドラマはすつきりするが、周りの共同体とのかかわりはどうなのか、気になる。ドラマを社会観で評価するのははいやだが、山田氏のドラマには社会観がでてきていると思っ。

X いや、ドラマにはなまじの社会観は必要なし。50年代の政治と文学の論争(代々木対「近代文学」)じゃあるまいし。

【ドキュメンタリー】

Y 芸術祭参加のドキュメンタリーで入賞したのが札幌テレビ「まっすぐに智華子、夢へ全盲の少女、18歳の軌跡」、NHK・Nスペ「終わりになき被爆との闘い」被爆者と医師の68年、毎日放送・映像、13「隠された事故、焼身自殺の真相を追う」、テレビ金沢「にぎやかな過疎、限界集落と移住者たちの7年間」、大賞が関西テレビ「みんなの学校」。

Z 「みんなの学校」はNHKの「終わりになき被爆」と争って、芸術祭作品賞ではもうNHKはいいだらうということで決まった。ユニークな女の校長先生のドキュメントで、いまの議論の風潮にマッチした。

X 全盲の少女を10年追った「まっすぐに智華子」に注目した。パハリピックの水泳(背泳)に出場する選手のドキュメントで「あなたにはなんでもできる。できないことはない」と育て上げたお母さんが凄いい。このお母さんが先導して「もうちょっと

と右「左」と声をかけて少女を自転車に乗せるシーンが感動的だった。

Y 前に何本か作られ、今回10年分がまとめられた。映像が分厚い。

Z またもということになるが、塩田純氏が目立つ。

X 「終わりになき被爆との闘い」は凄いい作品だが、似た作品に静岡放送「死の棘、じん肺と闘い続ける医師」がある。長い時間懸命に闘う医師の姿だが、話のスケールの大きさはNHKの方が大きい。

Y 番組は毎年作り続けてだんだん深いところに入ってきている。60年経って新しい白血病が出てくる事実は番組が放送されても世間にはあまり知られていない。

Z ETV特集のシリーズ「ネットワークでつくる放射能汚染地図」の3年目で岡野真治氏をまじえて追及していた。

X 戦争ものではETV特集で火野葦平を扱った「従軍作家たちの戦争」(8・14放送)「戦場で書く火野葦平の戦争」(12・7放送)が印象深い。この2本で火野が戦争に関わった責任を感じて自死したことが明らかにされている。

Y NHKで中国を扱ったNスペが3本あり。現在の中国を困難な取材から、その変わりようを見事に描いている。その1つが「激動中国 怒れる民と密着 紛争仲裁請負人」(6・16放送)。中国は各地で紛争が起きているが、その仲裁を請け負う中国人がいる。「中国激動 空前の農民大移住」(10・6放送)はマンションが出来てき

しい抽選に当たって入居したが職がない。抽選にはずれた人も大変だ。「中国激動」

「さまよえる人民のころ」(10・13放送)は仏教、儒教、新興宗教など社会主義国家の人民の信仰を扱う。この3本はどれも中国の新しい事実として知っておく必要のあることを伝えている。

Z グランプリの候補ではないが、フジBSの「フライムユース」(20時)は政治家、経済界、法律家などの今の体制を支えている人物を呼んでやっている。田原総一郎のように一方的に追いつめるのではなく、その人物がどんな人物か、何故そう考えるかを2時間たつぷり語る。司会はメイ

ンが女子アナで八木亜希子と金曜は島田彩夏。骨格を聞くのは反町理政治部長。政治部記者だともカメラマン。報道カメラマン上がりは信用できる。先日は元NHK経営委員長の古森重隆が出ていた。安倍総理に近くNHKをおかしくした人物だが、富士フィルムがいかに困難な時代を生き抜いてきたかをどうと語り。聞いているとどんな人物か考え方がよくわかる。現代の政財界人物の資料を提供する意味で面白い。

X 気持ちよく語らせて、本心をかいまみせるインタビュー術もあるのだ。相手を攻めて警戒させるだけでは司会失格だから。

Y 昨日は倉本聡で「北の国から」について語った。あの番組は反町氏のこまかい突込みがいい。風格がTBSの故料直矢に似ている。

Z いま日本の食糧自給率は3割以下だ。「キッチンが走る」(NHK金曜20時)はそんな状況でキャンピングカーで農村をまわって生産地の食材を料理し、生産者に喜びを教える。つい、「明るい農村」でやってきた農村の変遷を思い出す、産業構造が変わったいま、1次、2次、3次産業を結びつけ、6次産業の可能性をうかびあがらせる番組の企画を褒めた。

X 「いっちゃん女の相撲宣言」(大沼潤山形放送)は負のイメージをまといがちな女相撲の過去を掘り起こした力作で、古いフィルム記録映像で女相撲が地方で栄えた実情を丹念に描いていた。

Y NNDドキュメント「反骨のドキュメンタリスト大島渚忘れられた遺言」をめぐる(目テレ1・13)はいまの時代に放送するという企画意図がいい。あの番組はいまの社会に向かって「大衆はみんな災害でも戦争でも自分は被害者だと思っているが、実は加害者なのだ」と言っている。

Z 番組の中心は大島渚のドキュメンタリーだがそれをドキュメンタリー制作者などに語らせ、加工した。昔見たときよりずっとよかつた。Dは若い女性だ。

X 戦後史証書プロジェクト「日本人は何をめざしてきたのか」の4回シリーズ(NHK5回)8回、1月4、11、18、25放送)は「福島・浜通り」「三陸・田老」「下北半島」「山形・高島」。福島は原発、田老は防波堤、下北はプルサーマル、高島は農政を扱い、3・11で浮かび上がった東北の

被収奪構造をあきらかにしている。災害関係の番組でこんな文明史的な作品はほかにないだろう。

Y 下北半島六ヶ所村への波は何度も来ている。原子力船むつ、原子力3法、核燃料のあと処理、貧しいところ、地域を金でひっぱたくあざとび。

Z 国家の僻地利用の典型だ。反対運動の運動家が市長に当選したら2期目には原発誘致に変わり、東電にお願いに行く。民放各局もやっているのだが、この番組がもっとも凄みがあった。

X 東北の中央に対する恨みつらみとコンプレックスがある。会津藩が会津を追われて向かった斗南も下北半島だった。

Y そんな僻地にも自分の意思を貫く人々がいる。証言をよく拾っている。

Z NHK広島が2011年から中国地方の里山のドキュメント番組をシリーズで続けている。地域エコノミスト藻谷浩介氏をナビゲーターに「**里山資本主義**」と題し、番組経過は本にもなつて中央公論主催の新書大賞を受賞した。

一方、今年には伊勢神宮と出雲大社の60年に一度の遷宮で、出雲大社についてはNHK広島局が番組を作っている。大和と出雲、古代史、律令制、出雲大社に何故あんな高い建築物ができたかなどを調べて、広島局が番組を作った。Nस्पでも放送したが、1ローカル局が古代史の壮大な仮説に取り組んでいる。原爆ものに里山と出雲大社の二つをやるNHK広島局というのは面白い。

X 原爆ものだけではない。古事記や日本書紀にみる国造り神話の二極性、つまり天皇制国家の政治的磁場、出雲大社にみる庶民社会に日本の二面性をみる。

Y その広島ものでもE.T.V特集「ガタロさんが描く町々清掃員國家のヒロシマ」、ドキュメンタリードラマの「**基町アパー**ト」などNHK広島はユニークな視点が光った。

【ラジオ】

Z 民間放送連盟の最優秀賞を受賞した3つの番組が芸術祭でみんな落ちるという具合に、他に多くのすぐれたドキュメンタリーがあった。この5年の中で一番よかったと思う。

X 芸術祭優秀賞の「**音取りのカチ**」(CBCラジオ)は在宅医療をテーマにした番組で、主人公が亡くなる場所をしっかりと音声でとらえている。

Y 茨城放送の「**原子力50年 ある村長の決意**」が開局して初めて芸術祭賞を受賞した。開局して50年目だ。村上達也東海村村長が当初は原発推進派だったのがどうして脱原発に変わって行くのかを描く。それを縦軸にこれまでの茨城放送の特番を横軸にはさみ込んでいる。

Z 放送人グランプリの個人賞ということでは、毎日放送の森崎俊雄さん。民放連の報道の最優秀賞を受賞した「**原発作業員が語る2年目**」を作った。彼は毎週金曜の1時間番組「報道するラジオ」を担当し、ふだ

んはニュースを担当する報道部の記者だ。

X 証言しているのは7、8人で、真っ暗な中でいかに困難な作業をしているか、6次下請け、7次下請けとめちやくちやなピンハネをやられていると喋っている。

Y 民放連ワイド部門賞を受賞した「**ピピカン**」(日々感謝)中国放送。アーサー・ビナードが広島市の平和公園をまわって、核分裂の数式E=MC²の2乗とだけ刻まれている碑の前で語る。

Z 最近よく聞くのは荻上チキの「**セッシン**」(TBSラジオ22・00〜24・55)。「アクセス」より多様性があり、ポジティブな改善策を提案する「**ポジ出し**」が売り。

I T企業家を含む若いゲストが面白い。例の作曲家佐村河内のことなどもテレビがおよび腰なのがいち早くとりあげていた。

X 土曜の午前4時「**東京ポッド許可局**」(TBSラジオ)が面白い。深夜のトンでもない放送時間だが、マンネリな「深夜便」にあきて聴いている。出てくるのはサンキユウタツオ、キタスポーツ、プチ鹿島の3人で、主にネ

ットとステージで活躍してマスメディアに登場していないタレントたちだが、雑談の奥が深い。単なる物知りではなくしゃべった気があり、屁理屈があり。江戸粋人の会話を思わせる。

Y NHKの朝に「**すっぴん**」(月〜金、8・00〜11・50)という帯があり、その金曜が高橋源一郎。「源ちゃんの現代国語」と題しているんな本を取り上げるのが面白い。



Z NHKが「日曜あさいちばん」でやっている、なごら健一の「あの頃のフークが聴きたい」がいい。これだけ幅広い日本フーク史は今までなかった。総集編をCD化して欲しい。

X NHKの土曜の午後、大阪発「かんさい土曜ホットタイム」の中の3時台「ぼやき川柳」(通称「ぼやせん」)が面白い。

X 話は変わるが中波ラジオは音が悪くてだめだ。いずれサイマルでFMをやることになる。デジタルに行く前にそうなるだろう。

Y ドرامはNHKがFMシアター「2233歳」やオーディオドラマ「瑞穂のくに」(TTPの脅威にさらされるコメ農家のドラマ)などで圧勝で、民放のラジオドラマにはすぐれたものがなかった。

Z 異色なのが市民のカンパ、醸金でコミュニケーション局48社などで放送されている報道・教養番組「ラジオフォーラム」の動き。反原発の姿勢が提供主に嫌われ放送中止に追い込まれた「種時きジャーナル」(毎日放送)の在野スタッフが立ち挙げた。市民参加の「局がダメなら番組があるさ!」は、もつと注目されている。

◇2月28日(金)午後2時~5時半
◇千代田放送会館2階会議室
出席・石井彰、伊藤雅浩、隈部紀夫、河野尚行、鈴木典之、藤久ミネ、前川英樹、松尾羊一
書面参加・渡辺紘史

思想としてのテレビを考える

◇日本テレビ史序説研究公報

当会の主要事業の一つ「放送人の証言」記録(現在176人収録)が、日本の戦後放送史を現場の視点で語り継ぐ貴重な「オーラルヒストリー」(口述資料)であることは、折にふれ会報でも強調していますが、来年がラジオ放送開始から90年の節目とあって、この証言記録に注目する機運が会の内外で高まっています。

その一環として、東京大学大学院情報学環のメディアコンテンツ研究機構(主宰・石田英敏教授)が、証言記録をもとに本格的な学術研究に取り組むことになり、このほど「日本テレビ史序説研究会」を立ちあげました。2月22日、その初の報告と討論の会が、当会やNHK放送研究所との共催の形で、東大・本郷キャンパスの福武ホールで開かれ、他大学の専門研究者や当会会員など60名近くが参加しました。報告テーマは2つ。

▽「放送人たちと占領期、そして戦後社会」
講師・桜井均(元NHKプロデューサー、当会会員)

▽「テレビはどのように社会を描いたか」
講師・石田英敏教授。
桜井氏は終戦前後の日本放送協会の現場を体験しているNHK先輩の中から、フランク馬場、武井照子、藤倉修一、柳沢恭雄、新井和子、岡本愛彦、秦豊などの証言を番

組風に編集し、戦時の大本営統制下と戦後の占領軍(GHQ)検閲、指導下の放送の役割の変容ぶりを豊富なエピソードで解説し、その経験が民放のスタートやテレビ時代にどう継承されたかを、放送の他律と自律のはさまの意識とシステムの問題点として興味深く提示しました。

一方、石田教授は、「仮設の試み」と断りながら、テレビドラマは社会の今を映し出すことから社会の欲望を生み出す機能に変化して来た」と指摘し、例として和田勉、大山勝美、今野勉3氏の活躍に触れ、その方法論や作品世界の違いを考察しました。

今回の報告は共に「お披露目」的な簡略な試論に留まりましたが、例えば石田報告の概念的・認識論的分析には、会場に居た大山勝美氏本人が「アカデミズムとはこういうことか」と驚いて笑いを誘うなど、放送現場の日常感覚を超える知的刺激が新鮮に映りました。

また、今野勉氏も会場から石田分析に補充意見を加え、テレビ現場と研究者の知の交流が活発に行われ、研究報告会の主旨は生かされたように思われます。

参加者討論では、放送人の側から時代との関わりの体験談が語られました。東京芸術大学情報センターの松井茂助教授が、目下研究という「テレビの思想、或いは思想としてのテレビとは何か」という論点を提起し、注目されました。この点については、桜井・石田両氏も「テレビ固有の思想の在り処」を含めて重視していて、「放送

人の証言」の膨大な蓄積から放送現場の後輩が汲み取り生かすべき基本的な課題が端的に示唆されたようです。定期的に開催したい(石田主宰教授という研究報告会での交流に期待感がわきます)。

(鈴木典之 記)



第11回 人気番組メモリー

題名のない音楽会

テレビ朝日 毎週日曜朝9時〜放送

日時・2月11日(火・祝日)

場所・浜離宮朝日ホール(小ホール)

ゲスト・富田勲(作曲家)、高嶋ちさ子(バイオリニスト)、鬼久保美帆(番組プロデューサー)

司会・大山勝美

▼放送人の会主催のイベントで初めて使うホールで定員400名。参加申し込みは1200と定員の3倍だったのだが、大雪の後道路には雪がまだ残っていて客席は7割ほどの入り。



大山勝美氏

▼司会の大山氏の解説によると、この番組は50年続いた長寿番組で、テレビ60年の歴史の中で稀有、ギネスブックに登録されているとのこと。そのうちの33年を黛敏郎が司会をつとめ、黛氏のあとは永六輔、武田鉄矢、羽田健太郎、そして現在は佐渡裕である。

富田 あの時、島居坂レジデンスに住んでいて、隣が黛さん。エレベーターの1階か

ら6階の間「題名」の打ち合わせをしました。「×月×日あいてますか?」「OKです」とか。黛さんは電子音楽にも興味があった、うちへよく視察にきました。

あるときシンセサイザーの配線の手伝いを若い人に頼んで、お昼に宮川に鰻の並みを3人前頼んだら、しばらくして特上が3人前届いた。食、終わった頃、宮川から「あれは606号室の黛さんのところへ届けるもので」と電話があったが、もう手遅れでした。



富田勲氏

▼イベントの構成、進行にあたったのは番組Pの鬼久保氏。これまでの番組の中から「挑戦」「コラボ」「教育」のテーマごとに映像を選び、紹介した。



鬼久保美帆氏

「挑戦」のテーマでは、箏曲、尺八、彫刻家岡本太郎のピアノ、美空ひばりのオペラ「トスカ」の Aria、天童よしみの「ハバナラ」など、この番組ならではのシーンを紹介した。

富田 美空ひばりの「トスカ」は凄い。歌がうまいというのはこういうことかと思っただ。ひばりは楽譜が読めないが、一度聞くと覚えてしまうのだから楽譜は要らないんだ。

高嶋 私は、羽田健太郎さん司会の時、娘さんと一緒にコンサートで出演したのが最初です。旦那にきつい奥さんの小間使いという役でした。佐渡さんはニューヨークで審査を受けたときの審査員で、雲の上のひとだと思っていました。最近やつとふつうに話せるようになりました。佐渡さんはタクトは忘れてもバナーは忘れない。スコアは忘れてもゴルフ雑誌は忘れないひとです。

「題名」のテーマ曲はバーンスタインの「カンデイド序曲」ですが、バーンスタインに師事した佐渡さんはヨーロッパでこの曲を演奏し、「題名」について「ヨーロッパにそんな番組はない、うらやましい」と言われたそうです。

▼「コラボ」のテーマでは、サクソスと尺八、中村福助の常磐津とオーケストラ、などが紹介される。

鬼久保 歌舞伎とオペラは誕生した年代がほぼ同じでコラボはやりやすい。常磐津文字兵衛(5代目)、CM、器楽、声楽の作曲多数の協力で「カルメン」をやりました。文字兵衛さんは東京芸大で黛さんの「作曲論」を受講なさっています。

▼映像で明珍火箸が紹介される。
富田 姫路で1000年の歴史のある火箸で、鋳型でなく叩いて作ります。シンセサ

イザーで初めて使いましたが、このハイの音はアナログ録音ではなかなか入らない。デジタルでやつと可能です。火箸は25歳で来日したステイビー・ワンダーに「古代の雰囲気味わえる」と贈りました。ステイビーはいつまでも耳元で鳴らして「宇宙からの音と耳のそばで鳴る音が同じだ。凄い音だ」と喜んでいました。

▼「教育」のテーマではブーニンのピアノ、レッスンなどの公開レッスンとオーケストラを指揮する「振ってみよう」が紹介された。

高嶋 中村絃子さんの情熱的なレッスンは大うけでした。

鬼久保 中学生のとき「振ってみよう」に出演した少年が佐渡さんの母校の京都・堀川高校に入学し吹奏楽部を指揮し、とうとう芸大に入って指揮の勉強をしています。この番組が一人の少年の人生を変えたようです。

▼最後に高嶋さんは村松亜紀さんのピアノ伴奏で「リベルタンゴ」を演奏した。難度の高い変奏を派手な弓使いで演奏し、「カッコイイ」と声がかかった。



高嶋ちさ子氏

大震災とラジオを振り返って

武本宏一

あの東北大震災から、早くも3年が経過した。

当時、テレビに代わって避難民たちの主要な情報ツールになったラジオについて、あらためて見直してみよう。

ここに、当時の地元ラジオの活動を綿密に記した報告文がある。筆者は、福島の単営AMラジオ局・ラジオ福島の菅野左千男編成局長である。

平成23年3月11日午後2時16分、ラジオ福島では午後の看板ワイド番組「かっ」とびラジオ」を放送中だった。

「お、地震ですね。いま揺れております。スタジオの中でも揺れております。皆さん身の安全を確保して下さい。」

深野健司アナウンサーが、すくさま呼びかけた。ラジオ福島は、これより350時間余りの生放送に突入したのである。

全力をあげて取材、といっても、実は同局は社員55人。中継車も2台しかなく、しかも全国で3番目に広い面積を持つ福島県とあって、どんなに中継車を走らせてたとしても、被災状況のすべてを伝えることなど、不可能なことだった。

それでも、停電や被災のためテレビがほとんど視聴できない状況の中、ラジオ、そ

れも携帯ラジオとカーラジオだけが人々の情報源となっていた。

しかし、インターネットも含め、多くの通信インフラも使用不能となってしまっている。

そうした中、ラジオ局の一人が、持っていたiPhoneでネット接続が出来ることを発見、早速Gmailのアカウントを設定し、ここに市民、県民の情報を集めるべく呼びかけた。

すると、このGmailに、被災者たちから様々な情報が次々に送られて来たのだ。ラジオではすくさまこのメールニュースを読みあげ、放送を続けた。

ラジオとインターネットとは、実は素晴らしい親和性を持っている、という事実が、この震災ほど切実に確認されたことはなかった。

たとえば、radioとの連動。ラジオ現場では、エリア制限を解除したradioに加入を申請し、4月になって復興支援放送として結実した

スマートフォンでもラジオ福島が開こうようになったのだ。また、動画配信サービスのUstreamもラジオ福島を配信してくれ、なんと世界中から同局に、励ましの反応の便りなどが寄せられてきた。

更に、短波放送のラジオNIKKIEIも協力した。

エリア制限なしに全国で聴くことが出来るので、県外に避難した県民の安全情報な

どがこれによって判明するなど、効果は少なからぬものがあつた。

こうして様々な異種メディアとトキケングしつつ、ラジオ福島は「震災の今」を放送し続け、聴取者を支え続けてきた。

しかし、と菅野は言う。まだまだ反省すべきことが多い。

その一つが、原子力災害に対する備えだけは全くなく、いまま後回しになっているという。

ともあれ、新しい2wayラジオをこれを機会に構築していこう、というラジオ福島の健闘を祈りたいものである。

(資料は日本民放クラブ会報の「皆で語ろう民放史」より)

「新宿ブレイマップ」と田家秀樹君

田中秋夫

3月の某日、新宿区三栄町にある新宿歴史博物館で開催された写真展「新宿・昭和40年代」熱き時代の新宿風景」を見に行く。今、あの時代の文化状況が若い世代に注目されているという。

その日は同会場でノンフィクション作家で音楽評論家の田家秀樹君の講演が行われた。「昭和40年代の「新宿と若者文化」と題した講演は彼の仕事の出発点だったタウン誌「新宿ブレイマップ」を中心に話が展開された。彼との出会いはこの雑誌が創刊さ

れる直前の1969年3月頃だった。

当時ラジオ各局は東京オリンピック後のラジオ不況に苦しんでいたが、文化放送はその状況を打開する為に開発部を新設し、社内各部署からユニークな人物を集められ新規事業を次々に打ち出していった。

その第一弾が先輩K氏の発案による「新宿メディアポリス宣言」だった。「街をメディア化する」という発想から文化放送が新宿区にあるデパートと商店街に呼びかけて紀伊国屋書店の田辺茂一さんを委員長とする「新宿PR委員会」を組織した。具体策として新宿駅東口にサテライトスタジオを開設し生放送を実施する他、新人歌手の登竜門となる「新宿音楽祭」を開催することなどを打ち出した。

その一環としてタウン誌を創刊することを決め、さっそく社内準備が用意された。その編集スタッフに応募してきたのが若き日の田家君である。

当時の新宿は若い藝術家が集うサブカルチャーの拠点でもあった。アングラ演劇、ジャズ喫茶、ロック、フォーク等のライブハウス、サイケ調のゴーゴークラブ等、当時台頭し始めた若者文化のすべてが新宿に集まっていた。

「新宿ブレイマップ」と命名されたそのタウン誌はサブカルチャー志向の編集方針が話題となり創刊と同時に若者たちに支持されていた。当時新進気鋭の演劇人、作家、イラストレーター、写真家たちが毎号誌面を飾っていた。

その頃、新宿西口の地下「広場」は連日のフォーク集会が機動隊に排除され「通路」に変えられた。期を同じくして「ブレイマツプ」の編集方針が「街の健全化」を志向する新宿PR委員会のメンバーと次第に対立するようになり、同誌はあえなく3年ほどで廃刊という運命を辿る。

その後、田家君は文化放送の深夜番組「セイヤング」が新たに創刊する機関誌の編集を担当することになった。彼はタイトルを「ザ・ビレッジ」と命名し「深夜は若者の解放区」というイメージの編集方針を掲げ、時には表紙に若いカプルのヌード写真を掲載するなど大胆な誌面で物議をかもしこともあつた。しかし、深夜放送チームもあり、リスナーの若者たちに圧倒的に支持された。

彼はこの編集に携わる一方、音楽番組を中心に放送作家としても活躍し始める。彼の構成は局内で好評で、多くのレギュラー番組を担当することになる。私も彼が構成を担当したドキュメンタリー番組をコンクールに出品し、賞を受賞した経験がある。やがて彼は吉田拓郎、中島みゆき等、多くのアーティストのドキュメンタリーを次々に発表する等ノンフィクション作家として活躍し始める。又、音楽評論家としても評価されるようになり、現在はレコード大賞の審査員も務めている。

今回、彼の講演を聞きながら、ゴールデン街で飲み明かした頃の光景を思い出した。また「熱き新宿」が実感出来た時代だった。

AMラジオの現状を多少知っていただくために

加藤 勇男

数年前、都内の大型電器店を訪れた時ラジオ売り場が隣の時計売り場よりスペースが狭かったことにショックを受けた記憶があります。今はどうかと、先日、近くの大型電器店を訪れた際、ラジオ売り場をのぞいてみました。

ラジオは、電気掃除機の隣に都内の某店よりスペースも広く、棚も3列で、1列にはラジオ単体が、後の2列にはCDとカセットあるいはそのいずれかの機能付きラジオが並んでいました。ホッとすると同時にラジオとカセットの組み合わせは「時代に取られ残されたもの同士の組み合わせでは」との感がなくもなく、ちよつと寂しい思いも。

ほとんどのラジオは電源が接続されていず、また、乾電池が装填されていないので実際の音を聞けるのはほんのわずか、その中の1台に電源を入れてみました。FMはクリヤに聞こえましたが、AMはノイズのみ。

これがAMラジオの抱える数ある問題の一つ「受信環境の悪化」の一例です。

何故、大型店の店内でAMラジオが開かないか？「コンクリートの壁がAMの電波を遮断しているから」が答です。マンションにお住まいの方は、窓際とはかくく

室内ではAMラジオはほとんど聴取不能のはず。

また、AM電波のノイズに弱いという困った特性は木造住宅にお住まいの方も経験しているはずで、例えば、ラジオを聞きながらパソコンや照明のスタンドに電源を入れるとすぐノイズが入ります。同じコンセントを使っていたら事態は絶望的に。

ケーブルテレビ局によるAMラジオの再送信が増えているのもこの状況が理由です。

では、外ではどうか？

都心を走行中、車中でAMラジオを聞いている人はほとんど皆無ではないでしょうか。周囲の高いビルで電波は遮蔽され、もし届いても、空中至る所に張り巡らされた電線によるノイズで聴くに堪えない状況にあります。せつかくの交通情報もお役に立たません。

しかし、高速道路で郊外に出ると状況は好転、さらにAMの特性、遠くまで届くことによつて、着工直近まで東京のAMラジオ局を聞くことも出来ます。冬季長野オリンピックの時、長野市内でTBSラジオが聞こえたり、深夜放送の受信報告が北欧から届いたり、その特性にびっくりしたこともありました。

しかし、これが逆目ともなります。中国や韓国のラジオがよく聞こえるのです。電離層の関係で、九州や山陰のAMラジオ局は、特に夜間、全く聴取不能にもなりません。日本でも中国や韓国に負けずに、またアメ

リカ軍のラジオ局のように出力を高くすれば解決するのではと思われるかもしれませんが、民放ラジオのサービスエリアは本来的には行政単位内に限定されているのでそうはいきません。

更に厄介な問題がAMラジオにあります。

東日本大震災の発生時からしばらくの間、ラジオはメディアとして再評価されました。特に、ミニFM局の活躍はめざましく、東北各県の被災24市町で26の臨時FM局が開設され、現在も14局が放送を続けています。

しかし、津波が海岸を襲い、河川を遡上する光景を見て、AMラジオ関係者の中には、別の意味で大衝撃を受けた人が多数いたはず。

AMラジオの送信アンテナはほとんど海岸の砂地や河川敷きに自局専用で建てられています。例えば、TBSラジオの送信アンテナは埼玉県戸田市の荒川の河川敷きにあり、その一基のみで関東全域をカバーしています。

地中にアースを張りめぐらすためかなりの面積を要し、しかも湿地がよいところとて海岸や河川敷きが適地になります。約20年前でしようか、TBSで建て換えの話が出た時、候補地も千葉県木更津市の埋立地でした。

一方、FMはどうでしょうか？TFMは東京タワーに、J-WAVEは東京スカイツリーにアンテナを設置しています。

行政に対してラジオ局は、テレビ局に比べ、統一歩調を取ることが少ないのですが、その要因の一つがこの辺りからも見えてきます。

将来の災害に備えるために、また、更新時期を迎え、多くのAMラジオ局はアンテナの建て替えを迫られています。しかし、AMラジオの将来に光明が見えない中、無駄な投資は避けたいはず。

「AMアナログ放送は出来たら止めた」。これがAMラジオ局経営者の本音でしょう。

続きは、いずれ改めて。

新入会員紹介 ①

竹中一夫（たけなかかずお）49年5月生。NHK番組制作局科学産業班（自然のアルバム）「ウルトラアイ」、科学ドキュメントなど制作。91年〜ハイビジョン推進協会（放送部長、97年長野放送放送部長（長野五輪対応）、99〜総合企画室、デジタル放送推進。現在（株）放送衛星システムB・S・A・T特別経営主幹。

土屋敏男（つちやとしお）56年9月生。「元気が出るテレビ」「電波少年」「ウツチヤンのウルナリ」など制作。日本文化デザイン賞、ATP特別賞受賞。現在日本テレビ編成局専門局長。LIFE VIDEO社長。

いろはに時代劇 その九

菅野高至

前回の末尾「任された竹山さんは『もう書けない』と思つて、疾走する……」と書いた。疾走は誤りで、正しくは「失脚」である。汗顔の至りである。

この時、私は竹山さんの失踪に気づかなかった。清左衛門の後番組の脚本作りに忙しく、「夢」はOKだと思ひ込んで、暫し竹山さんを忘れ、浮気をしていたからだ。浮気と言つても、ほとんど公認なのだが、髪振り乱して「はやぶさ新八御用帳」と格闘していたのだから、やはり脚本家は面白くなかつたようだ。「なに、俺の清左衛門はもう、どうでもよいのかい？」と。

そんな嫉妬心も引き金になつたのか、第一回から普通の何倍も苦しんで書いていた彼は、不眠不休、疲労困憊のピークを超え、ついに熱発し、仕事場の神楽坂の定宿「和可菜（わかな）」の一室から逃げ出してしまふ。気がつけば新幹線に飛び乗つて、西国の海辺の町に辿り着き、好きな女の家で高熱を発して倒れる。

人は誰もが嫉妬する。嫉妬が創作のバネになる。だが、竹山さんの失踪は明らかに気配り不足の私に責任がある。今なら、脚本は残すところ5本、ここが胸突き八丁と考え、本妻の心に決してさざな波を立ててはならじと、なるべく後ろ髪を引かれる思い

を露わにし、つかの間、はやぶさ新八に会いに行かせて貰います、と丁寧に言いもしようが……。

さて、神楽坂の毘沙門天、善国寺の向いの細い路地、人ひとり通れる路地を降りていくと客室教わずか五室の和風旅館がある。「ホン書き旅館」の「和可菜」と言う。竹山さんはいつもここを使う。創業54（昭和29）年というから、今年で創業60年になる。脚本家や映画監督、作家や演出家の執筆や打合せの場として業界の人々に愛用されてきた。内田吐夢、今井正、浦山桐郎、深作欣二、早坂暁、野坂昭如、市川森一……。ここから世に出た作品が数多くヒットすることから、「出世旅館」とも言う。竹山さんもこの出世ジnkスを固く信じている。

「ここで書く」と、名作になるのよ、菅野ちゃん」と。

我々スタッフにとって便利なのは、深夜でも出入り自由なこと、近くにこれ又、便利な「二十四時間営業・年中無休」の台本印刷「三交社」があるからだ。

79年から80年代、遅筆な作家を抱えるドラマ人間模様班では、実に重宝な印刷屋さんであった。当時NHKのスタジオ収録では深夜0時で照明電源が自動的に落ちてしまい、渋谷の町に出れば、横町の飲み屋以外は真っ暗だった。そんな時代に、深夜2時過ぎに「三交社」に原稿を入れに行くのと、印刷機が回り、若い人が忙しく立ち働いていた。初めて見た時、「凄！」と感動したのを今でも鮮やかに覚えている。感動

の余り、数日後、ロケ現場の商店街でお菓子を買って、深夜の入稿時に差入れをする。NHK関連の印刷会社は、夜は動かさず日曜は休みだった。なのに「三交社」は年中無休が偽りなく、元旦しか休まない。

年末年始を挟んだホン作りとなつた、遅筆堂主人・井上ひさしの「國語元年」のルビ付台本も、普通の原稿とほぼ変わらぬ時間で正確に仕上げた。元旦の夜に貰った数枚の原稿が、2日には数頁の印刷になった。「恐るべしサンコウシヤ五現業」と、ひさしさんに呆れられた。この語呂合せ、今はもう通じない……。

本題に戻る。打合せから、十日余、ファックスが届く。89枚の原稿だった。一気に読んだ。良〜くできている。演出が間違わなければ、賞を狙える作品になると思った。さつそく「和可菜」に電話を入れる。竹山さんはいなかった。女将の和田さんに訊ねると、ここ数日はおりませんという。いつも、女将さんの答えは「いる」か「いない」かのどちらかで、作家の行動を細かく伝えようとはしない人である。作家に愛されるゆえんであるのか。だから、失踪の果てとは思ひもよらず、ファックスの発信は市外局番だったが、気にも留めずに印刷に廻す。

二時間ほど後、竹山さんから電話がある。「よい。面白かった。直して欲しいところはありません」と言った。その後は、いつも通り、次の打合せの日取りを決めて、電話を置いた。

竹山さんに言わなかったが、気がかりがひとつあった。脚本の作りは、清左衛門が家を出て人に会って涌井に泊まり、翌朝家に帰るまでの、まる一日の話になっている。従って、思い悩む清左衛門を描くため、多重の回想で構成されて、テンス(時制)が五つくらい出てくる。普通の連ドラではお客様が混乱するからと多重の回想は使わない。普通を超えた連ドラだから、まあいいか、分かる人には分かれると開き直って決定稿にする。

1か月後、完バケが出来る。清水一彦の演出が良い。若いのに端正だ。試写の評判も良い。それでも、回想の多重構造に不安がよぎる、高齢者にも分かるか、と。

番組をつくる時には、いつも必ず、見せたい人、見て貰いたい人など、見る人を決める。見る人には、放送を見ている空間と時間をイメージ出来る人を想定する。それは、取材で出会った人や、友人や先輩、家族だったりする。これは、初任地のNHK山口で、茶飲み話から取材に入るよう心がけてローカル番組を作った時の名残で、習慣という癖のようなものである。

「清左衛門」を見る人は、同居をはじめたばかりの義母であった。

放送日、6月4日を迎える。その夜、家に帰り、義母に直接聞くのは恥ずかしいので、連れ合いに「おかあさん、分かったって言った？」と訊く。連れ合いが「うん、面白かったって言ったよ」と言う。

本当に分かったのか、まだ少し不安だった。

た。しかし感想のお手紙などを読むうちに、これこそが「連続ドラマの強み」なのだ、と改めて気づいた。たとえ込み入った手法を使っても、回を重ねて登場人物の性格や感情の揺れにちゃんと馴染んでいけば、お客様は難なく、多重な回想を理屈で無く「夢」の清左衛門の気持ちに寄り添って、その心情を受け止めてくれたのだ。今更だが、「連続ドラマの積み重ねの強さ」を実感する。

第43回放送人句会

◇平成26年3月12日(水)

◇赤坂・麦屋

◇出席：伊藤健郎、荻野慶人、鶴橋康夫、

豊田まつり、新村もとを、藤森いずみ、

森治美、

西川阿舟(8人)

◇不在投句：大山勝美、山県ほん太

◇兼題：陽炎、鳥帰る、鱈、吹替へ

鱈旨しまことに春の魚なり

鳥帰る北緯三十八度越え

陽炎のように旅して眠りたい

陽炎や掴んでみれば手だけあり

陽炎や駅のすぐ脇の火車

鳥引くをいついつまでも目で追はん

船寄せて鱈をほいと投げくれし

*

陽炎や地球は浮いてあるさうな

銅鑼の音に逆らうごとく鳥帰る

陽炎や人も車も揺れつつ来

西の窓今日何度目か鳥帰る

春日いつばいアラン・ドロンは野沢那智

鳥帰る空にぽっかり穴あきぬ

陽炎や黒猫うちの床下へ

吹き替への違和感つまみに春の酒

夢一つなほ捨て難し鳥帰る

鱈ほしさしみ照焼昨日今日

酒粕の程よく香る鱈膳

鳥帰るわれ帰る故郷無人なり

逝く春や吹替の声替りたる

陽炎やタンカー揺れて過ぎ行きぬ

大皿に盛りられし鱈に祝ふ

波の紋躍る鱈の腹の息

水溜りあるかに見えて陽炎へる

鳥帰る被災地出づるまた一人

見えぬ道見えて傘寿の鳥帰る

鳥帰る出自育ちの序列かな

波荒き鳥の鱈を味噌焼きに

陽炎やお札所までは道なりに

吹替の美声に酔ふも目借時

一筋の命の流れかかげるいぬ

陽炎を十指広げて透かし見る

陽炎や苦い記憶にむせにけり

陽炎を境界として農の墓

陽炎や数年たぶん見しが見ず

鳥帰る親はあるかふるさとに

慶人

阿舟

阿舟

阿舟

阿舟

治美

まつり

いずみ

ぼん太

勝美

もとを

勝美

まつり

もとを

視郎

治美

ぼん太

阿舟

康夫

康夫

康夫

ぼん太

ぼん太

まつり

康夫

康夫

いずみ

ぼん太

まつり

慶人

陽炎や平家の里に迷い込み

鳥引くや北国に人見失ひ

陽炎を背に去る姉御謎めきて

春つららモノローの声吹き替えに

次回放送人句会

◇平成26年5月7日(水) 18・00頃か

ら、19・00投句締切

◇赤坂・麦屋 (E403-3386-0056)

◇兼題：鱈、母の日、祭、とり(映画演劇

テレビ用語)

☆特別選者：星野高士氏

新入会員紹介 ②

吉田賢策(よしだけんさく) 48年3月生

70年テレビ朝日入社。「ニュース・ステー

ション」創立。編成で「モツアルト・プロ

ジェクト」「牛山純一昭和史シリーズ」(民

放連最優秀賞)を担当。ライツ推進部長、

メディア戦略室長、コンテンツ事業局長を

経て05年から東日本報道制作担当取締役

東北朝日プロダクション社長。

榎本恒幸(えのもとつねゆき) 49年12月

生。73年毎日放送入社。東京支社編成部長

本社メディア部長、BS-i編成・営業担

当取締役、毎日放送東京支社長を経て、現

在専務取締役。「まんが日本昔ばなし」「じ

やリン子チエ」を担当。

会員名簿

2014.3.5 現在

【あ】青木裕子 赤井朱美 秋田完 秋山豊寛 雨宮望 新井和子 【い】池田正之 石井彰 石井ふく子 石高健次 石橋健司 石橋冠 磯智明 磯野恭子 磯村健二 市岡康子 市川哲夫 市村元 一色伸夫 伊藤雅浩 井上佳子 井上良介 今井義典 岩澤敏 岩瀬弥永子 【う】上田洋一 上村忠 碓井広義 臼杵敬子 歌田勝彦 内山洋道 宇野昭 【え】江口展之 榎本恒幸 遠藤利男 遠藤ふき子 遠藤雅充 【お】大池雅光 大蔵雄之助 太多亮 太田敬雄 太田昌宏 大西康司 大西文一郎 大野秀樹 大原れいこ 大山勝美 大類啓 岡弘道 岡田晋吉 緒方陽一 岡野真紀子 岡村黎明 小川治 小河原正巳 沖野瞭 荻野慶人 尾田晶子 小田久榮門 織田晃之祐 【か】加賀美幸子 各務孝 片岡敬司 勝部領樹 葛城哲郎 加藤滋紀 加藤節男 加藤拓 加藤迪 加藤義人 金澤宏次 金沢敏子 金子登起世 兼歳正英 金平茂紀 加納孝夫 鎌内啓子 上安平冽子 亀谷弘美 鴨下信一 川喜田尚 川口健一 川口幹夫 河村正一 【き】岸田功 北川泰三 北川信 北出晃 北村美憲 北村充史 木村成忠 【く】楠美昌 工藤英博 久保志穂 隈部紀生 倉内均 黒沢淳 【こ】小池勝次郎 河野尚行 小玉滋彦 児玉久男 後藤和晃 小山紳人 近藤一男 近藤邦勝 近藤晋 今野勉 【さ】斎藤伸久 斎藤秀夫 斎明寺以玖子 酒井美樹男 寒河江正 坂元良江 桜井均 佐々木彰 佐々木欽三 佐藤敦 佐藤年 澤田隆治 沢田隆三 【し】重延浩 重村一 静永純一 志津木敬 四宮康雅 柴田昌平 嶋田親一 清水満 志村一隆 下崎寛 下重暁子 白井博 【す】菅野高至 菅野嘉則 杉澤陽太郎 杉田成道 鈴木昭典 鈴木典之 鈴木道明 鈴木嘉一 須磨章 【せ】関佳史 せんぼんよし 【そ】菅根英二 【た】高島秀之 竹中一夫 武本宏一 田澤正稔 田中昭男 田中秋夫 田中直人 田中則広 田原茂行 【ち】崔銀姫 【つ】辻本昌平 土屋敏男 露木茂 鶴橋康夫 【て】寺島高幸 【と】東城祐司 堂本暁子 戸田桂太 外崎宏司 豊田由紀子 豊原隆太郎 【な】中尾幸男 中込卓也 中崎清栄 中島僚 中田美知子 永田浩三 長沼士朗 永野敏一 中村敦夫 中村克史 中村季恵 中村耕治 中村敏夫 中村美美子 中山和記 並木章 【に】新村もとを 西憲彦 西村与志木 西ヶ谷秀夫 西川章 仁藤雅夫 二宮文彦 丹羽美之 【の】信井文夫 【は】橋本潔 林健嗣 原由美子 原田令嗣 【ふ】深町幸男 藤井チズ子 藤久ミネ 【へ】逸見京子 【ほ】星田良子 星野輝一 堀川とんこう 【ま】前川英樹 牧之瀬恵子 松尾羊一 松平定知 松前洋一 松本修 薫りんたろう 【み】三上義智 水上毅 水野憲一 三原治 三村景一 三村千鶴 宮崎洋 宮川鑑一 三宅恭次 明神正 【む】村上光一 村上雅通 村上佑二 村田亨 【も】本木敦子 諸橋毅一 門奈昌彦 【や】八木康夫 矢島良彰 藪内広之 山鹿達也 山県昭彦 山崎隆保 山崎裕 山路家子 山田尚 山田良明 山根基世 【よ】横山英治 吉澤保 吉田賢策 吉永春子 吉村豪介 吉村直樹 【わ】和崎信哉 渡辺紘史 【賛助会員】一般社団法人 日本民間放送連盟 TBSメディア総合研究所 一般社団法人 融合研究所 一般社団法人 日本ケーブルテレビ連盟

新入会員紹介 ③

近藤邦勝 (こんどうくにかつ) 44年5月生。元TBS。現在(株)テレパック代表取締役社長。

内山洋道 (うちやまひろみち) 41年3月生。元信越放送(メディア戦略担当)取締役。浅間山荘事件報道チーフプロデューサー。

倉内均 (くらうちひとし) 49年5月生。71年テレビマンユニオン入社。88年アマゾン設立。10年アマゾンラテルナ設立。取締役会長。12年ATP理事長に就任。主な演出作品・「日本のいちばん長い夏」(日本映画批評家大賞特別賞)「佐賀のがばいばあちゃん」(メルリン・アジア太平洋映画祭グランプリ、モントリオール国際青少年映画祭グランプリ)「炎の料理人北王路魯山人」(放送文化基金賞、ドラマ賞、ギャラクシー奨励賞)「母とママと私」(ATP優秀賞、青森市文化賞)

志村一隆 (しむらかずたか) 68年2月生。91年WOWOW入社。営業部、編成部、経営企画部、営業企画部。01年ケータイWOW代表取締役。07年情報通信研究所グローバルG。著書・「明日のテレビ」(朝日新聞出版)「ネットテレビの衝撃」(東洋経済)「明日のメディア」(ディスカバー)

菅野重則 (すがのよしのり) 65年9月生。90年日本テレビ入社。情報番組ディレクターを経てCG、アニメーションの企画・演出プロデュースを担当。95年スタジオジブリ出向、CG室長。05年(株)幻生社設立。代表取締役。白鷗大学特任教授。

編集後記

▼今年も放送人グランプリ下馬評座談会をお届けします。今回対象番組名一覧は、データ量が大き過ぎて掲載できませんでした。座談会で触れていない優れた作品は多数あると思います。そんな作品をどうかノミネートしてください▼9名の新入会員を紹介しましたが、3つに分けて掲載したのは編集の都合でとくに意味はありません。広告みたいで注目度は高くなるという意見もありましたがどうでしょうか▼3月の放送人句会は出席8名でやや淋しい会でした。これまで出席なさった方は次回是非ご出席ください。新しい参加者もちろん大歓迎です▼編集部はこのところ病気が続きます。松尾さんは相変わらずうまく病気がつきあっています。伊藤は2月初旬インフルエンザをこじらせ、9日間入院。退院した後、軽い眩暈を起しました。鈴木さんは腰痛です。新しい戦力が加わらない編集部は危ないと思います。自薦、他薦どちらでも結構です。編集部員を推薦ください。